

秋の講演会

平成25年10月26日、武居 渡 先生（金沢大学 人間社会研究域 学校教育系）をお迎えして秋の講演会を行いました。

台風27号の接近により、開催が危ぶまれましたが、進路が近畿より大きくそれたことで開催することができました。味覚糖UHA館を会場にして、たくさんの参加があり、『きこえない子どもにとっての手話』という題でご講演いただきました。レーダーバーグ氏、シック氏、スペンサー氏が今年発表した、最近の聴覚障害に関する142論文の総説をまとめた論文についての解説や、ご自身の体験を交えながらきこえない子どもたちにとっての手話の意義について、大いに語っていただきました。

参加していただいた方の感想を掲載して、講演の様子をお伝えします。



参加者の感想

- ・「わからないこと」がわかるためにどうすべきかを考えさせられたと思います。聴覚障害者のモデルを見ながら子どもや親御さんが成長していくような取り組みが幼児期から長期的にできたらと思いました。武居先生ご本人の体験エピソードが印象に残りました。
- ・学校生活、日常生活を通して「日本語を嫌いにさせない」という先生の言葉が印象的でした。さらにわかるということがわかると、わからないことがわかる→わかるための手段を講じる。本当にその通りだと思います。言葉を育てることは子どもを育てることですね、現場で、先生の話を読み出しながら、授業をしたいと思います。
- ・『生まれつき「ろう」者なのではない』という視点にすごく感銘を受けました。教育に関わっている者として、より良い「ろう」者としてのアイデンティティーを持てるようなかわりをしていきたいと思いました。
- ・わかるということがわかることで、わからないということがわかるようになる。そのことでわかるための方法を考えられるようになる、というお言葉が大変印象に残りました。ありがとうございました。

- ・自分が働いているろう学校の幼稚部では聴覚口話法を中心に指導しています。聴覚を活用することは大切ですが、手話も使うことも大切だと改めて感じました。子どもたちにとって、分かる経験を積むことが大切というのがとても印象に残っています。大学で出会った友人の話やろう文化のことなど、例も含めた分かりやすい講演、ありがとうございました。CODAとしての意見もとても参考になりました。石川のろう学校に見学に行ってみようと思います。
- ・先生のお考え(お示しいただいた手話の意義)に深く共感しています。手話の力を生かして日本語の読み書きの力を伸ばすということに本校でも取り組んでいます。またご来校を頂きご指導を受けたいです。障害認識における親や教師のろうのとらえ方の大切さについてはもっともっといろいろなところでお話ししていただきたい考え方だと思いました。人工内耳の子のアイデンティティーについてのお話は、本校にいる子らの実態からもうなずけるもので、これからまたご研究をお聞かせいただきたいです。
- ・自分自身が聞こえないということはどう捉えているか、「聞こえない」ことに向き合う姿勢が必要…。本人だけではなく周りの大人に問われたことが心に残りました。最後の砦である公立のろう学校に勤める教員としてしっかり取り組んでいきたいと思えます。



今後の予定は下記の通りです。

平成26年 1月31日(金) 第3回代表委員会(京都府立聾学校)

2月 1日(土) 冬の学習会(京都市 ホテルルビノ京都堀川)

『きこえに課題のある子どもへの支援

—わかりやすい授業の視点を考える—

京都府立聾学校舞鶴分校

芦田 雅哉 先生

『小児人工内耳の過去・現在・未来と再生医療』

京都大学大学院医学研究科耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教授

伊藤 壽一 先生

3月中旬

集録第15号発行・機関誌46号発行



近畿教育オーディオロジー研究協議会事務局

事務局長 松川 雅一

〒591-8034

大阪府堺市北区百舌鳥陵南町1丁

大阪府立堺聴覚特別支援学校内

TEL: 072-257-5471

FAX: 072-257-3310

メール: kinki02062@hotmail.co.jp